

特集：「学習指導要領」改訂～その意義と課題～  
子どものための道徳の授業をつくる  
～新学習指導要領及び学校でのアンケート結果の検討を通して～

栗 加 均  
(文教大学教育学部)

Making the Class of Moral Education for Children:  
Through the Examination of the New Course of  
Study and the Result of the Questionnaire

KURIGA HITOSHI

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

道徳の時間は道徳教育の要として位置づけられ、要としての役割を果たすよう求められている。一方、教師が自信をもって道徳の授業を実践するためには、明確で具体的な多様な方法が求められているが、新しい学習指導要領もその解説も明言していないし、過去の学習指導要領や指導書においても同様である。学校現場の教師が、授業をやらなければと思いつつも困り悩み戸惑っている実態を明らかにした。この現状に対して、道徳の授業の多様な試みを子どもや教師のために具体的に提示していく必要がある。

1. 学校における道徳教育

社会が変われば人が変わり、人が変われば社会も変わる。たえず激しく流動する現代の社会にあっては、人がその社会の変化についていけないというのが現状である。こうした人の変化は、大人よりも鋭く感覚的である子どもたちに端的に現れている。

この社会のなかで子どもたちが、力強くたくましく生き抜いていくことに対して道徳教育への期待は高まってきている。それ故に、道徳教育を通して、「道徳的問題や困難に遭遇しても何も見つかからない。だが、心のなかには、希望があったから大丈夫。」という構えを子どもたち一人ひとりのなかに育てたいのである。そのためには、まず、子ども自身が、人としての本来的な在り方を引き寄せ、その生き方を吟味し追求する道徳教育がなされなければならない。

本論では、子どものために教師が大切にしなければならない道徳教育の要としての、道徳の時間とその指導（以下「道徳の授業」という）が新しい学習指導要領では、いかに位置づけられているのか、そして、戦後教育の流れのなかで学習指導要領及び指導書・解説の変遷によりどのように示されてきたのかを明らかにし、今後の道徳の授業の在り方を示唆したい。

2. 学校における道徳の授業

教師は、子どもたちに、ひとりの人として「よりよく生きる」ことの本質を見すえ、自らの道を切り拓き、大きく成長することをたえず志向する、そんな確かな生き方を自分の手で掴みとってほしいと願っている。

教師のこうした願いと道徳の授業が大きくかわるのは、いうまでもない。この授業の

なかで、子どもたちは、互いの人柄や持ち味をだしあい、道徳的なさまざまな価値について考えを深め、心情を豊かにし、新たなる意欲を胸にたぎらせる。

また、教師は、この授業を通して、子どもの感性や人間性を発見する。しかも、一人ひとりの子どもが鮮明に見えてくる授業を目指している。さらに、授業のなかで、教師も、子どもたちと同じひとりの人間として、自己存在の意味や生きがいを求めてともに成長するのである。

反面、学校現場では、学級担任の教師から「道徳の授業は難しい」「授業のやり方がわからない」「授業で子どもが変わらない」「よい資料がない」などといった多くの切実な声を聞く。こうした声に対して、「指導上の問題が生ずる背景には、教師の道徳教育や道徳の時間に対する十分な理解や認識がされていないことが考えられる。」<sup>(1)</sup>と片付けるのは、簡単である。しかし、社会の急激な変化に伴い、人間関係の希薄化、規範意識の低下が見られるなかで、子どもたち一人ひとりが道徳教育を求め、道徳の授業を望んでいると真摯に受けとめ、それに応えようとしている教師自身の悲痛な訴えととらえることもできる。そこで、まず、新しい学習指導要領では、道徳の授業がどのように示されているのかを覗いていきたい。

### 3. 新しい学習指導要領と道徳の授業

今回の学習指導要領の改訂で、道徳教育、道徳の授業がいかに重要か、また、この授業をいかに実践していくかが重要な課題となっている。

中学校学習指導要領の第1章総則、第1教育課程編成の一般方針において「2.学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校かなめの教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応

じて、生徒の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」<sup>(2)</sup>と示している。

さらに、第3章道徳、第1目標では、道徳教育の目標に続いて「道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。」<sup>(3)</sup>と述べている。つまり、この目標の前段では「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養う」<sup>(4)</sup>としていることから、道徳の授業を道徳性を養う道徳教育の要としてしっかり位置づけ、各教育活動における道徳教育の要としての役割を果たすよう求めていると言える。あわせて道徳の授業における子どもが身につけるべき能力を「道徳的実践力」と明示している。

さらに、1996年の中教審答申で提唱され、現行及び新しい学習指導要領の中核となっている「生きる力」を道徳の授業では、道徳的実践力として具体的に生きて働くように子どもたちのなかに育んでいくことを求めている。

### 4. 道徳の授業における指導法

教師が道徳の授業を求める子どもたちを前に自信をもって実践するためには、明確で具体的な多様な方法が必要である。

道徳の授業については、改訂中学校学習指導要領では、第3章道徳第3指導計画の作成と内容の取扱いで「3 道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。(1) 学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実すること。(2) 職場体験活動やボランティア

活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、生徒の発達段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。(3) 先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、生徒の発達段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。(4) 自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。(5) 生徒の発達段階や特性等を考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、情報モラルに関する指導に留意すること。』<sup>6)</sup>にとどまり、具体的に示していない。

しかも、改訂中学校学習指導要領解説道徳編では、学習指導過程の創意工夫として、「道徳の時間の学習指導過程とは、ねらいの根底にある道徳的価値について生徒が内面的な自覚を深めていくための指導の手順を示すものである。すなわち、それは、生徒自らが望ましい人間としての生き方を追求し、道徳的価値についての見方や感じ方、考え方を深めていく過程を明らかにするものである。」<sup>6)</sup>と述べ、「道徳の時間の学習指導過程は、一般的に、導入、展開、終末の各段階を設定することを基本とするが、いたずらに固定化したり形式化することなく、それぞれの学級の実態、指導の内容や意図、資料の特質、他の教育活動との関連などに応じて弾力的に扱うなどの各段階での多様な工夫をすることが大切である。」<sup>7)</sup>とし、(1) 導入の工夫、(2) 展開の工夫として、資料提示の工夫、発問構成の工夫と生徒が主体的に人間としての生き方を追求し、思考を深める工夫(3) 終末の工夫 について概説している。

さらに、各教科等との関連を図りつつ、今後の発展につなぐ工夫も大切となり、とりわけ、子ども一人ひとりが、自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめるこ

とができるような工夫が枢要となる。

改訂解説編では、指導方法の創意工夫として、「道徳の時間の指導効果を高め、ねらいを達成するためには、資料提示の工夫、発問構成の工夫、体験活動等を生かす工夫などを通して指導方法の効果的な活用を図るとともに、学習指導過程の各段階において、観察や調査、実物に触れる活動、コミュニケーションを深める活動、感性や情操をはぐくむ活動などを、従来から広く活用され成果をあげてきた指導方法のなかに積極的に取り入れることが大切である。」<sup>8)</sup>と述べ、(1) 読み物資料の利用、(2) 話合い、(3) 教師の説話、(4) 視聴覚機器の利用、(5) 動作化、役割演技等の生徒の表現活動、(6) 板書を生かす工夫 について詳述している。

道徳の授業は、子どもの生活経験に基づいてねらいとする道徳的価値を道徳資料を用いることによって確かなものとし、さらに自己を見つめることを通して道徳的価値を主体的に自覚する時間である。つまり、道徳の授業は、子どもたちが、ひとりの人間として「よりよく生きる」ことの本質を見すえ、自らの道を切り拓き、大きく成長することをたえず志向し、確かな生き方を自分の手でつかみとっていく場ということになる。

したがって、道徳の授業を、教師と子どもがともに人生を見つめ、よりよく生きることを求めて、ともに歩いていく時間と考えるならば、その意義は極めて大きい。

ここまで見てきたように学習指導要領は、道徳教育の要として道徳の授業を位置づけ、道徳教育推進教師を新たに各学校へ置くように定め、道徳の授業の実践を喫緊の課題としている。しかし、道徳の授業については、学習指導要領では、大要を定めているに過ぎず、学習指導要領解説道徳編においても、一見詳説されているようであるが、すぐに教師一人ひとりの授業の実践に至るような解説としては、十分とは言えない。これは、両者の在り

方や性格上制限があることも理解できるが、道徳の授業に対する「何をやってよいのかわからない」「曖昧すぎる」と言う学校での教師の切実な声とともに隔靴搔痒の感をもってきたのである。

## 5. 道徳の授業の記述に関する変遷

道徳の授業における指導法については、昭和33年3月の中学校「道徳」実施要綱に、「『道徳』の時間においては、児童、生徒の心身の発達に応じ、その経験や関心を考慮し、なるべく児童、生徒の具体的な生活に即しながら、種々の方法を用いて指導すべきであって、教師の一方的な教授や単なる徳目の解説に終わることのないように注意しなければならない。」<sup>(9)</sup>と表記され、以降の中学校学習指導要領では、昭和33年8月に第3章道徳、特別活動および学校行事など第1節道徳第3指導計画作成および指導上の留意事項8に「指導にあたっては、生徒の経験や関心を考慮し、なるべくその具体的な生活に即しながら、討議(作文などの利用を含む)、問答、説話、読み物の利用、視聴覚教材の利用、劇化、実践活動など種々な方法を適切に用い、一方的な教授や単なる徳目の解説に終わることのないように、特に注意しなければならない。」<sup>(10)</sup>と記されている。道徳の授業が始まったばかりであり、その内容も手探りで、いわゆる概論にとどまっている感がある。以来、平成元年3月の中学校学習指導要領まで、指導方法について記述は途絶え、平成10年12月の中

### 中学校学習指導要領 第3章 道徳<sup>(11)</sup>

平成元年版 第3指導計画の作成と内容の取扱い  
「3 …すべての内容項目が人間としての生き方についての自覚とかかわるように留意するとともに、生徒の発達段階を考慮して適切な指導を行うようにする…」

平成10年版 第3指導計画の作成と内容の取扱い  
「3 (2) …などの体験活動を生かすなど多様な指導の工夫、…生徒の発達段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。」

学校学習指導要領を経て、大きく変わることなく、新しい学習指導要領となった。

やはり、上記の通り、直接授業の実践に直接繋がるような表現はなく、学習指導要領解説道徳編でも学習指導要領よりも内容は具体的であるが、どうすれば、道徳の授業が実践できるかについて具体的に述べたものはない。

### 中学校学習指導要領解説道徳編「目次」より抜粋<sup>(12)</sup>

第5章	道徳の時間の指導
第1節	指導の基本方針
第2節	学習指導案の内容とその作成
第3節	学習指導の多様な展開
	1 学習指導過程の創意工夫
	2 多様な学習指導の構想
	3 指導方法の創意工夫
第4節	道徳の時間の指導における配慮とその充実

上記の「目次」の項目からも明らかで授業の実践に迫るものは乏しく、過去の学習指導要領の指導書・解説もこの域を出ない。こうしたことが道徳の授業の重要性を認めつつも、学校現場の教師には、その具体的な方法までは、伝わらず、「笛ふけど、踊らず」というよりは、「踊れず」と言った方が適切な状況である。

## 6. 道徳の授業と教師

それでは、実際、学校の教師が道徳の授業をどのようにとらえ、何をどう困っているのか、実態を明らかにし、それに対して何ができるのかを考察したい。以下の事例は、F県E市のM中学校からの指範授業と授業についての講義の要請を受け、どう授業を実践し、何について講義をすべきか把握したいとの当方の要望に対し、当該校が自主的に実施したアンケートの結果について検討したい。

M中学校は、全校生徒449名で17学級(特別支援学級1を含む)からなり教員27名(管理職・講師を除く)に対するアンケートによる調査であり、平成21年9月中旬に実施され、19名(回答率70.4%)から回答を得た。

そのアンケートの内容は、

### 1 道徳の授業に対するイメージ

- 2 日頃の授業で困っていること、悩んでいること
- 3 指範授業者から教えていただきたいこと
- という3項目からなる極めて簡単な内容であるが、それ故に現在の中学校における現状を明確に描出している。

表1 授業に対するイメージ

毎時間とても楽しみにしている	0	0%
どちらかと言えば、楽しく授業ができている	2	10.5%
どちらとも言えない	9	47.4%
あまり授業したくない	6	31.6%
道徳の時間は苦痛である	2	10.5%

予想はしていたものの表1は、授業への教師のネガティブなイメージが42.1%にのぼるという現実をしっかりと受けとめる必要がある。こうしたイメージを払拭することが最

表2 授業で困っていること、悩んでいること

授業の流れがワンパターンになる	9	16.4%
発言が少なく、授業が盛り上がらない	13	23.6%
価値が深まらない	7	12.7%
道徳的実践力がついていないか疑問	13	23.6%
道徳の評価	2	3.6%
教材研究をする時間がない	8	14.5%
よい資料がない	3	5.6%

表3 教えていただきたいこと

主に授業に関すること	8	38.1%
主に技術向上に関すること	5	23.8%
その他	8	38.1%

(13)

表4 授業の媒体・教材・授業の方法の関係

媒 体	教 材	授 業 の 方 法
文 字 読 み 物		道徳的価値の一般化(内面的自覚)を図る授業 価値の明確化方式の授業 コールバーグ理論に基づく授業
絵 画 ・ 写 真	絵 一 枚	思いやり育成プログラム(VLF)の授業 再現構成法による授業
音 映 声 像	音 音 像 ビ デ オ ・ D V D	音楽を活用した授業 ビデオ・DVD資料を活用した授業
身 体 子 ども の 活 動		思考経験を中心とした授業 役割演技・動作化を取り入れた授業 構成的グループエンカウンターを用いた授業 モラルスキルトレーニングに取り入れた授業 道徳的体験活動を生かした授業

優先の課題であることを認識している識者も少ない。また、表2の授業についての教師の悩みは、一層深刻である。授業の流れや内容についてが40%、子どもの変容やそのとらえ方についても39.9%の教師が困ったり悩んだりしていることを座視すべきではない。さらに、表3では、61.9%の教師が授業やその技術について知りたがっているという事実は、子どもたちの求めに対して、なんとか応えようとする教師の前向きな姿勢もうかがえるが、困り果てているというのが実態である。

一時、「道徳」を「教科」と言う議論のなかで、「道徳の時間が確保されていない、すべての学校で熱心に道徳の授業に取り組んでいないという実態、授業が形式化し実効があがっていない、子どもの受け止め方がよくないこと、教科書がないこと…」<sup>(14)</sup>と道徳教育に対する意識の問題があるとの指摘がなされた。上記のアンケートの結果と重なり合う部分もあり、道徳の授業に関わる教師の困難を克服することが急務である。

## 7. 子どものための道徳授業

今、まさに子どもの側にたった子どものための道徳の授業が求められている。その授業を通して、教師も子どもも同じひとりの人間として自己存在の意味や生きがいを磨きあい



成長していくことができる。そんなきっかけになるような授業を多くの教師に実践してもらいたいと考えている。

昭和33年に道徳の授業が始まって以来、勝部真長氏の授業理論に始まり、青木孝頼・井上治郎両教科調査官の主導した指導法を経て、平成に入り、新しい授業の指導法が取り入れられ様々な試みがなされてきた。ここでは、伝統的な方法から様々な試みを、表4のように道徳の授業を子どもと教材を結びつける媒体によって整理した。こうした様々な方法を取り入れ「ワンパターンで飽きられやすい」という問題の克服が試みられてきたが、残念ながら十分な解決には、至っていない。

今後、ここに掲げた様々な試みを子どもと教師のために、理論の精査、授業の構築、検証授業についての検討を通して、わかりやく取り組みやすい授業として、子どもも教師も楽しいと思える授業として、実践に耐えるものとして提示したい。

## 謝 辞

本論文作成にあたり、学習指導要領ならびに解説書等に、長年、関わられた平成国際大学講師押谷慶昭先生よりご示唆をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 註

- (1) 生越詔二「道徳授業の改善が求められる理由・背景は何か」岩上薫編集『道徳的実践力を高める道徳授業の改善ポイント』教育開発研究所,2009.p19.
- (2) 文部科学省『中学校学習指導要領』2008,p.15
- (3) 同上,p.112
- (4) 同上,p.112
- (5) 同上,pp.114-115
- (6) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』2008,p.88

- (7) 同上,p.88
- (8) 同上,pp.92-93
- (9) 文部省『中学校「道徳」実施要綱』1958,p.49
- (10) 文部省『中学校学習指導要領』1958
- (11) 文部省『中学校学習指導要領』1989,1998
- (12) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』2008,p.88
- (13) アンケートの具体的内容は、以下の通り

### 【主に授業に関することについて】(抜粋)

- ・生徒の発言が少ないクラスで、どのように意見を出させあい、価値を深めていけばよいか
- ・授業の中で道徳的価値を深めるにはどうしたらよいか
- ・生徒の活発な意見を出させる手立て
- ・生徒が本音ではなく、教師が望む答を言おうとする
- ・読んで明らかに道徳的価値が読み取れそうな資料で生徒の考えを深めさせることに難しさを感じる
- ・授業の最後は決意表明にならないようにすべきと考えるよいか

### 【主に技術向上に関することについて】(抜粋)

- ・一般化の上手なもっていき方
- ・これは知っておいたほうが良いという授業のコツ
- ・生徒がつまらないと思わないようにするには
- ・副読本を使って授業をする際のポイント

### 【その他の質問・意見】(抜粋)

- ・悩みが多すぎて、うまくいったなと思うことがありません
- ・道徳で、ディベートはしてはいけないか
- ・おもしろい資料があったら教えて欲しい
- ・中心発問は板書が望ましいのか

- (14) 生越詔二「『道徳』を教科にする、しないのそれぞれの理由は何か」岩上薫編集『道徳的実践力を高める道徳授業の改善ポイント』教育開発研究所,2009.p13.